

# 伝え

発行 日本口承文芸学会  
 ㊟192-03 東京都八王子市南大沢1-1  
 東京都立大学 中国文学研究室気付  
 ㊟ 0426-77-2145 FAX. 0426-77-2150

## 会への期待

会長 飯倉照平

子どものころ、昔話を話してもらったり、本で読んだりした記憶はほとんどない。母親から口づてに聞いて今でもおぼえているのは、「青葉茂れる桜井の」や「青葉の笛」などの小学校唱歌ぐらいのものである。敗戦後まもなくまではイワシ漁でにぎわった九十九里浜だから、盆踊りや浜での作業のさいの歌は聞いていたはずだが、今でこそ時おり地元の人たちとの酒の席で聞いて露骨なセリフをおもしろがるものの、子どもの耳は素通りしていったらしい。

強いて言えば、戦中戦後の貧寒とした半農半漁の村で高校卒業まで過ごした体験が、フォークロアへの関心を支えているように思う。高校卒業まぢかのころ書かされた作文で、戦時下の少年たちの「キタ・セクスアリス」を書き、疎開していた女生徒から「ほんとにこんなことがあったの、創作でしょう」と非難された記憶がある。東京から近いわりには古い農漁村の体質が色濃く残っている地域であることは、二十数年の都会生活をへて今またそこへもどって暮らしているだけに、痛切に感じられる。

仲間たちとやっている月例の研究会で、若い人が中国の農村について報告するのを聞いたあと、そんなことは日本の農村でも同じだと発言して、いつもの癖がまた始まったとみんなの失笑をかっている。しかし、異風異俗への関心も大いに必要だと思うけれども、その根底に自分たちの生活を見つめる姿勢がなければ、かつてのように侵略や商売に利用されるだけの資料づくりにおわってしまう可能性がある。

わたしが中国関係の学会にはまったくつきあいが無いのに（これも少しいじすぎるかもしれないが）、日本口承文芸学会だけには顔をだして仕事を手伝ってきたのも、この会には自分の足もとを見つめる眼があり、外国研究者のおちいりがちな欠陥をそれとなく補正してくれる機能があるのではないか、と感じたためである。いわゆる業績づくりを追われて硬直化した学会がふえているなかで、この会が従来の学問の垣根を取りはらった自由な討論の場でありつづけてほしいと思う。そのための裏方として、なんとか努力していきたいと念じている。（千葉県）

【ご報告】1993年2月の第8回理事選挙の結果、次の方々が新理事に決定しました。任期は、2年間です。（各地区別、五十音順）

北海道・東北地区（2名）	佐々木達司	藤本 英夫			
関東地区（4名）	飯倉 照平	荻原 眞子	川田 順造	武田 正	
東京地区（9名）	大島 廣志	小島 美子	高木 史人	徳田 和夫	牧田 茂
	松谷みよ子	三浦 佑之	宮田 登	吉田 敦彦	
中部地区（2名）	石川純一郎	水沢 謙一			
近畿地区（4名）	君島 久子	竹原 威滋	真鍋 昌弘	丸山 顕徳	
中国・四国地区（2名）	酒井 董美	友久 武文			
九州・沖縄地区（2名）	小島 瓊禮	山下 欣一			

<仲間たち>

## 津軽民話の会

佐々木 達司

津軽民話の会は1980年10月10日、5名をもって発足した。年に1回の研究例会、1回の共同探訪、1冊の探訪記録、1冊の会報をという、まことに志の低い会である。これまでに津軽民話研究会(1958)、昔の話を聞く会(1977)が挫折したその反省を踏まえ、これらを継承しつつ小さなことを地道に続けようということであった。決まりは会費千円を払うことだけで、会則もない自由な集まりである。

研究例会、共同探訪を毎年10月10日(体育の日)を中心に1~2日を当て、今年で14回になる。しかし、調査記録は3冊、会報は8冊だけといったありさまである。

青森県は川合勇太郎、斎藤正、能田多代子という、比較的早くから昔話調査を手掛けた先達がいるので調査の進んだ地域とみられがちであるが、市町村単位にみると未調査地域が圧倒的に多い。それは、前述の方々が自分の家で母や祖母、あるいは出入りの者から聞き書きするという形をとったため、系統だった調査は一、二の大学調査を除きほとんどなされていないのが実情である。

そのため、年に1回の調査でも1市町村ずつ回れば、10年で10市町村の調査ができる。共同探訪を主眼に、肩肘はらずに気楽にやっということになった。

これまでの探訪地は鶴田町、中里町、板柳町2回、市浦村、木造町2回、深浦町、森田村、車力村、今別町、五所川原市、弘前市。毎回4~5名と少ないが、県外からの参加者もいる。久保孝夫が函館市から毎回参加しているのを始め、これまでに阿部敏夫(札幌市)、花部英雄(川崎市)、ほかに昨年弘前大学に赴任した小池純一、地元弘前市の坂本吉加(以上本学会員)も加わった。

探訪記録は鶴田町、中里町、深浦町の3冊、木造町の方は町教育委員会の老人大学の昔話学習に協力する形で「木造町のわがしこ集」に収録したが、あとはテープのまま眠っている。

今後に残された課題も多いが、あせらず休まずの信条を貫きたいと思っている。

事務局・佐藤正治、代表・佐々木達司。  
(青森県五所川原市錦町1-114)

<外国通信>

## 韓国くわの口コミ

真鍋 祐子

韓国は口コミコミュニケーションの盛んな所だ。一般に情報統制の厳しい社会ほど、そうであると聞いている。これまで二度の韓国滞在を経験したが(1987~8年、1991~3年)、口コミにかける民衆のエネルギーは相変わらずのものであった。なにしろ、あちこちから取材した小咄・謎々集が大真面目に刊行されていたりするのだ(徐廷範著、全七巻)。

モチーフは主に「階級」と「政治」である。ソウルの場合、生活水準と階級による棲み分けが進んでおり、それを題材とした三段階方式の小咄がもてはやされる。つまり漢江を境にして、下町の「江北人」と山の手の「江南人」、そして欧米式生活方式をもった高所得者層の街「狎鷗亭の人」といった三層分化が見いだされるのだ。一度目の滞在時には「コーヒーの飲み方」が題材となっていたが、二度目の時は「学生の自家用車」に変わっていた。日本でも取り上げられたことのある「オレンジ族」は狎鷗亭の産物であり、あとの二つは「ミカン族」「キンカン族」として語られている。題材からもわかるように、社会は全体的にはリッチになったが、階級格差は歴然として残存する。政治権力者をはじめとする高所得者層は誇示的消費に走り、持ち物や生活スタイルから一目で個々の階級を見抜くことができる。紙数の都合で具体的に紹介できないのが残念だが、多様な口コミに耳を傾けつつ感じたことは、韓国は本質的に階級社会なのだという点だ。狎鷗亭の住人や政治家たちをコケにする時、そこには庶民の<シニカルな笑い>が込められているのである。

口コミの主なる現場は、おそらく茶房(チァン)と呼ばれる喫茶店か、酒場であろう。どちらも日本とは雰囲気随分異なっており、もとい、その生成過程や機能の面からして違いがあるよう見受けられる。コミュニケーションの場として茶房を捉え、情報のキー・ステーションとしての蓋然性を示唆したのは嶋陸奥彦氏であったが、筆者も同感である。真っ暗な地下壕のごとき、そして何処からともなく人々のヒソヒソ声のざざめいてくるその空間は、社会の底流に渦巻く民衆の<恨(ハム)>を寄せ集めた、まさにアンダーグラウンド・ゾーンなのである。

(茨城県つくば市、真鍋氏は筑波大学大学院)

去る6月5日6日の両日、東京郊外の多摩丘陵に聳え立つ東京都立大学を会場に、第17回大会が開催されました。そこで、池田香代子氏と重信幸彦氏にお願いして、当日行われた5本の研究発表およびシンポジウム「昔話伝説の比較研究はどこまで可能か——炭焼長者譚を例として——」の感想などをまとめていただきました。

シンポジウムを聞いて

池田 香代子

たしか1953年の宝塚雪組公演が炭焼長者だった、主演は寿美花代、などと軽薄なことをぼんやり考えたりして。高木さんのように厳密な資料批判を要求されたら（ごもっともなだけ）、外国をやる者は立場がないあと思っていたら、ほかならぬ福田さんが「一方でえいやっとやる必要」とおっしゃったのでひと安心。馬場さんと千野さんの70話になんなんとする中国の話の表は圧巻。それと併せて聞く松原さんの「炭焼じゃない」の説得力にははっとした。「事件」でした。柳田の炭焼長者・金属工芸集団という呪縛をチャラにして、あらためてこの話型を日韓中（インドにもあるとは驚き。仏伊独にはないね、塩問答の話は入れるとまずいんじゃない、と後でおしゃべりしました）の広がりの中で、なぜ日本で炭焼が突出してくるのかをいま一度問うのが第二ラウンドか、と思ったことでした。でも、もう炭焼長者譚と呼べないのならなんと呼べばいい？ あげまん譚？ まさか。（東京都）

「目をつぶって、エイヤッ！」——大会参加記——

重信 幸彦

研究発表では今までの口頭伝承研究の前提の問い直しにつながる意欲的な発表が複数あった。高木史人氏の発表は、聖なる時空の痕跡を残した言語表現という昔話観を相対化し、「昔話」を中心とした口頭伝承のジャンルの布置を問いなおすものであった。また川島秀一氏の「『本読み』の民俗」は、大正から昭和初期にかけて地域で講談本や新聞などを読み聞かせていた人々について、宮城県・気仙沼から報告を行い、オーラリティとリテラシーの重なりようを近代の日常生活誌のなかに探っていく可能性を示した。内ヶ崎有理子氏の江戸期昔話絵本「舌切雀」ものの分析も、絵と言葉のかかわり方、本という媒体の流通のしかたや読者のありようの問題などへの展開をうかがわせた。川島氏や内ヶ崎氏の発表は、「口承」性のみを特権的に対象化してきた従来の口頭伝承研究を日常のメディアのありようを問うことで相対化し、創造的にズラしていく契機を胎んでいたといえる。

一方、「昔話伝説の比較研究はどこまで可能か；炭焼長者譚を例として」と挑発的な題を掲げたシンポジウムは、「比較」研究にあたっての認識論であり「方法」が議論されることが期待されたが、やや不満が残った。中国、韓国からの事例報告で興味深かったことは、まずパネリスト達が「炭焼長者」という話型の名づけに対して慎重に距離を置こうとしていたことだ。「炭焼長者」という名前が、あくまでも日本の事例を中心にした名前であることが浮かび上がってきていた。その意味では、このシンポジウムを通して「炭焼長者」という名付けが解体されていく過程にこそ、自らの自明性を解体するという本来の「比較」の契機を探っていく方向がありえたのかもしれない。それはまた、アジアと日本の説話の「比較」を語る言説も、異文化を語る言葉が必然的に政治性をはらんでしまうことから逃れられないという現実到我々を対峙させたはずだ。かつての「大東亜共栄圏」という政治的言説も、「比較」の視線のもとでアジアの文化を冗舌に語っていたことを考えると、今、アジアという枠組みのなかで文化を語る言葉が、どう位置付けられるのかを押さえておく必要がある。それを欠いた「比較」など、「脳天気」の誹りは免れない。

だが、「炭焼長者譚」という名前が問われる一方で、同種と仮定されるある型の話についての議論が開示していたことも確かであり、あの時、我々はどうのような仕掛けによって多数の説話から一つの説話を分節して議論することが可能になったのだろう。説話の比較であれば、そこに言葉を与えることも必要だったと思う。「話型」でも「形態」でもいい、そうした仕掛けが「比較」という手続きのなかでどのようにはたらき得るのかについて論ずる余地もあったと思う。

そして、中国、韓国どちらの場合も、資料化と政治の問題が避けて通れないことを示唆していたことを挙げておかねばなるまい。その問題は今、「比較」研究が置かれている状況と問題点を具体的に浮上させ

る契機になりえたはずだった。しかし日本の事例を報告した福田晃氏は、この資料化の問題に関して、各国の文化や研究の事情が異なるのは事実だが、それにこだわっていたら「比較」は進まないとし、そうした問題は「エイヤッ！」と越えて先に進まねばならない、と言いつつ放った。その迫力に押されて他のパネリストからも「目をつぶって」といった発言が出た。それらは意地悪く見れば、ただ「おはなし」を較べたいという欲求のみが露呈した瞬間だ。結局当日、我々が手にした一つの「方法」は、この「目をつぶって、エイヤッ！」であったと言わざるをえない。

中国、韓国の報告のなかに、先のような議論の切っ掛けが提起されていたが、討論に十分に活かされなかったことが惜まれるのである。(福岡県)

【ご報告】1993年4月9日の第23回理事会において、会長ならびに各委員会等の担当者（運営理事・幹事）が次の通り決定しました。（各係の最初にあるのが委員長、\*印は会長指名理事）

会 長	飯倉 照平			
機関誌編集委員会	高木 史人	荻原 眞子	真鍋 昌弘	宮田 登
研究例会委員会	川田 順造	小島 美子	徳田 和夫	
庶 務	大島 廣志	*中村とも子	三浦 佑之	
会 計	*千野明日香			
口承文芸大辞典特別編集委員会				
	野村 純一	臼田甚五郎	川田 順造	直江 広治
監 事	高松 敬吉	鈴木 健之		
幹 事	木之内 誠			

- 会長の交替に伴い、学会事務局は会長の所属機関である東京都立大学中国文学研究室に移りました。
- 来年度大会（1994年6月）を金沢市の金沢工業大学で開催するため、別に、会長指名理事として藤島秀隆氏が推挙され、理事会で承認されました。

----- 受贈書リスト -----

- |   |                              |
|---|------------------------------|
| 雪国の春 15号 柳田国男を読む会 92.8                    | 奈良県立民俗博物館研究紀要 13号 93.2       |
| 民具マンスリー 25巻6～12号, 26巻1～3号                 | 奈良県立民俗博物館だより 18巻2,3号 93.1,3  |
| 神奈川大学日本常民文化研究所 92.9～93.6                  | 甲南国文 40号 甲南女子大学国文学会 93.3     |
| 日本学術会議月報 33巻12号, 34巻1～5号                  | 同志社国文学 37,38号 同志社大学国文学会 93.3 |
| 92.12～93.5                                | 国文学研究資料館報 40号 93.3           |
| 沖縄国際大学文学部紀要 21巻1号 92.12                   | 国文学研究資料館講演集 14 国文学研究—資料と     |
| 国立歴史民俗博物館研究報告集 41,45,46,48～               | 情報— 93.3                     |
| 50集 92.12～93.3                            | 「北の語り」通信 8巻2,3号 北海道口承文芸研究    |
| THE JOURNAL OF INTERCULTURAL STUDIES 1992 | 会 93.3,5                     |
| 関西外国語大学                                   | 北海道開拓の村における民話（北海道口承文芸研究      |
| 日本民話の会通信 105～107号 日本民話の会                  | 会例会パンフ） 93.3                 |
| 93.1～5                                    | 函館昔話 5号 函館パルス企画 93.4         |
| 学校の怪談 常光徹 ミネルヴァ書房 93.2                    | 聴く語る創る 創刊号 日本民話の会 93.5       |
| シベリア民話への旅 斎藤君子 平凡社 93.2                   | *おかげさまで。今後とも御協力下さい。          |

日本口承文芸学会への入会希望者は入会申込書をご請求ください。 入会金 1,000円、年会費 4,000円。

入会申込書請求先： ☎192-03 東京都八王子市南大沢1-1 東京都立大学 中国文学研究室気付  
日本口承文芸学会事務局（☎0426-77-2145助手室 FAX.0426-77-2150）

送金先：〔郵便振替〕東京8-044834

The Society for Folk-Narrative Research of Japan,  
c/o Department of Chinese Language and Literature, Tokyo Metropolitan University,  
Minami-Ohsawa 1-1, Hachioji-Shi, Tokyo, ☎192-03, Japan.

口承文芸に関心のある方を広くご紹介ください

☆委員は交替しましたが、今号もワープロとコピーで作成しました。（編集担当；大島・中村・三浦）